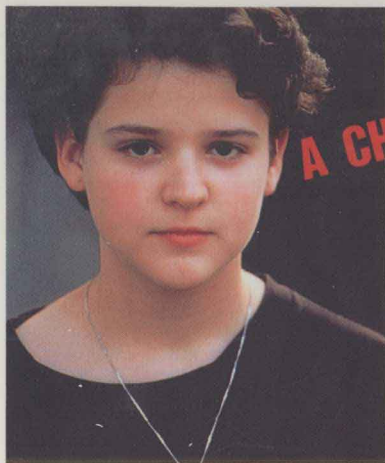


ズラータの日記

ズラータ・フィリポヴィッチ / 相原真理子訳



A CHILD'S DIARY OF WAR

ZLATA'S
DIARY



Dne
ovaj
koji im je ostao, mirno
proveli. I to su mo-
nali pokvariti.
Danas nisam
išla u školu, ni
u muzičku. Vratili
su danas cijeli
čau, pitajući, svirajući
Negram; Harisom
i kad ilirne
su nas tako da
dan provesti u kući, ilimmy, da
klas, drveći se sa pokvarili.
Danas sam se sa pokvarili.
ali i to su. mi pisala, ilimmy, da
Nisam ti pisala, ilimmy, da
ti u svijet. Stampaćes se u
svijetu. Ja sam ti o nati, a ti pri-
čas svijetu ono ti o svijet ima i
sala. Pisala sam ti o nati, a ti pri-
sarjere u nati, a ti o svijet ima i
lju da to sarjere iz ovih naših
nedova. Pisala sam ti ovih naših
sam ja ojetila, čula i vidjela rat,
a sad će i ljudi van Sarajeva to
osjetiti, čuti i vidjeti preko ovih naših
Sretam ti put u svijet, ilim

Zlata

ZLATA'S DIARY

by Zlata Filipovic

ズラータの日記

ズラータ・フィリボヴィッチ著
相原真理子訳

Elata

ズラータの日記

Printed in Japan.

著 者 ズラータ・フィリポヴィッチ
訳 者 相 原 真 理 子
印 刷 図 書 印 刷 株 式 会 社
製 本 図 書 印 刷 株 式 会 社

振替 東京 7-2639 番
電話 東京(3942) 2311 番
東京都文京区音羽 1-21-11
定価はカバーに表示してあります。

発行 株式 二見書房
会社

ISBN4-576-94073-2

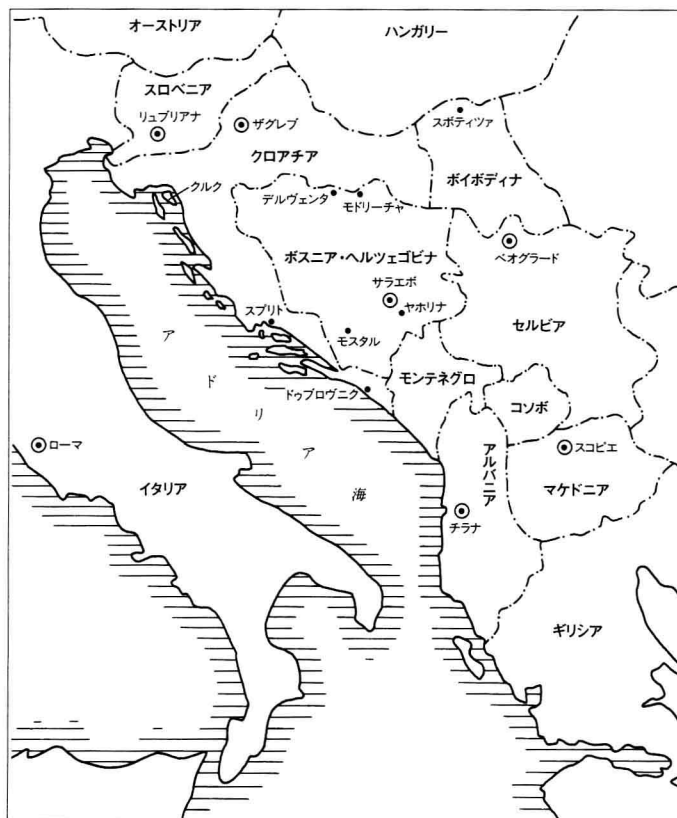
ズラータ・フィリポヴィッチはボスニア・ヘルツェゴビナ的首都サラエボ生まれの少女である。ズラータは数年前から日記をつけていた。日記は学校生活や友だちのことなどを綴った子供らしいものだったが、ボスニアで内戦が勃発するとその内容は一変し、砲撃におびえる戦時下での生活の様子が描かれるようになる。恐怖や悲しみ、怒りを自分のことばで綴ったズラータの日記は学校の先生が目にとまり、反戦活動をする市民団体により数千部が印刷された。

やがてフランスのジャーナリストがこの日記に着目し、ズラータの許可を得てこれをフランスで出版した。日記はフランス国内で大きな反響を呼び、その後オランダ、イギリス、ドイツ、アメリカなどでもあいついで出版された。

日記を読んだ人が「少なくともいつとき、サラエボにいるわたしたちに思いをさせてくれる」ことが、日記の出版を承諾したズラータの願いである。サラエボの悲劇の貴重な証言であるこの日記を通じて、わたしたちは旧ユーゴスラビアの苦悩や絶望を理解するのだ。

ズラータの日記

GIVE
PEACE
A
CHANCE ♪



一九九一年九月二日 月曜日

わたしの後ろにあるもの——長くて暑い夏と楽しい夏休み。目の前にあるもの——新学期。わたしは五年生になります。学校の友だちに会うのが待ちどおしい。またみんなといっしょになるのが楽しみです。先学期の終わりを告げるベルが鳴ったあの日以来、会っていない子もいます。またみんなといっしょに、学校での楽しいことやいやなことを話せると思うとうれしいです。

ミルナ、ボヤナ、マリヤナ、イヴァナ、マーシャ、アズラ、ミネラ、ナジャ——またみんないっしょです。

一九九一年九月十日 火曜日

この一週間は本や学用品を買ったり、お休み中に海や山、それに田舎^{いなか}や外国に行った話

をして過ごしました。みんなどこかに行って、楽しい思い出をいっぱい作ってきました。

一九九一年九月十九日 木曜日

音楽学校のレッスンも始まりました。週に二回、ピアノとソルフェージュを習いに行きます。テニスのレッスンもつづけています。そうそう、テニスでは「年長」のグループに上げてもらいました。水曜日にはミカおばちゃんところに英語を習いに行って、火曜日には合唱の練習があります。これを全部やらなきゃいけないのです。学校の授業は金曜日以外は毎日六時間あります。なんとかやっていけるかな……。

一九九一年九月二十三日 月曜日

五年から始まる工作の授業（新しい課目）について書いたかしら。先生はヤスミナ・トウライリッチ。わたしは彼女が大好き。この授業では木のことを勉強します。何からできていて、どんなふうに使うかといったこと。けっこうおもしろいです。もうすぐ実習が始まります。木やほかの材料でいろんなものを作るの。きっと楽しいと思います。

先生たちはもう小テストをやりはじめています。歴史に地理に生物学。勉強しなきゃ！

一九九一年九月二十七日 金曜日

学校から帰ってきたところです。とてもつかれた。きつい一週間でした。あしたは土曜日だから好きだけ寝ていられます。土曜日ばんざい！あしたの夜は「用事」があります。イヴァナ・ヴァルネクのバスデー・パーティーなのです。きょう「招待状」をもらいました。このパーティーについてはあとで全部書くわね……。

一九九一年九月二十九日 日曜日

いま午前十一時。イヴァナの誕生日たんじょうびはほんとほんとはきょうなんだけど、パーティーはきのうでした。すごく楽しかった。小さなロールパンやサンドイッチ、ほかにもいろいろなごちそうがありました。もちろんいちばん大事なものの——ケーキもね。女の子だけじゃなく男の子も来ていました。ダンスコンテストをして、わたしが優勝しました。賞品は小さな宝石箱。

ひとことと言えば、パーティーは大成功でした。

一九九一年十月六日 日曜日

いまMTV（ケーブルテレビのミュージック・テレビジョン）でアメリカのトップ20を見ています。どれが何位だったかぜんぜんおぼえてないけど。

ハムとチーズ、ケチャップとマッシュルームがのったフォー・シーズンズ・ピザを食べ終わったところなので、とてもいい気分です。すごくおいしかった。パパが近所のピザショップのガリヤで買ってきてくれたの。たぶんこのピザを食べてたからテレビの内容をおぼえていないんだと思う。

ちゃんと勉強したから、あしたはわるい点をとることを心配せずに、胸をはって学校へ行けます。絶対いい点がとれるはず。週末のあいだ、友だちと公園にも行かずにずっと勉強してたんですもの。いつもはお天気がいいと、みんなで「真ん中のおさるさん」をして遊んだり、おしゃべりしたり、散歩したりします。要するに、楽しく過ごすわけ。

一九九一年十月十一日 金曜日

きょうはきつい一日だったけど、がんばりました。数学の小テストーA。国語の筆記試

験―A。生物の口頭試験―A。つかれたけど、いい気分です。

また週末がやってきました。今週はツルノティナ（ここから十五キロくらいのところにあるうちの別荘。建って百五十年にもなる家と広い果樹園があつて、国の文化財として保護されています。パパとママが修復しました）へ行くことになっています。おじいちゃんとおばあちゃんはまだそこにいます。早く会いたいな。ヴィルダナと犬のアティ、新鮮な空気、きれいな田舎の景色。みんな恋しい。なにはともあれ、今夜はぐっすり寝ます！

一九九一年十月十三日 日曜日

ツルノティナではとても楽しく過ごしました。行くたびにうちの別荘（とても風変わりな家）や、まわりの田舎の景色が好きになります。みんなでナシやリングゴやクルミの実をとったり、クルミを盗んでいったはしっこいリスの写真を撮ったりしました。夜はバーベキューをしました。わたしのお得意は「チェヴァプチチ（巻いた肉を焼いたもの）」。おばあちゃんがアップルストウルーデルを作ってくれました。わたしは植物標本にするためにいろいろな葉っぱを集めて、アティと遊びました。

秋が夏にとってかわり、その筆でゆっくりと確実に自然を彩いろどっています。木の葉は赤や黄色に色づいて、散っていきます。日が短くなり、寒くなってきました。秋もほんとにす

てき！どの季節にも良いところがあります。なぜか町にいるときはツルノティナにいるときほど、自然の美しさに気づきません。ツルノティナでは自然は良い香りがして、わたしを暖かく迎えて抱きしめてくれます。自然の美しさを味わいながら、すばらしい週末を過ごしました。

一九九一年十月十九日 土曜日

きのうはほんとにひどい一日でした。週末にみんなでヤホリナ（世界じゅうでいちばん美しい山）に行くことになっていました。でも学校から帰るとパパが制服を着て、ママが泣いていました。警察予備隊の特別班に召集されたとパパが言うのを聞いて、のどに大きなかたまりがつかえたような気がしました。わたしはパパに抱きついて、行かないで、うちにいてと泣きながらたのみました。でもパパは行かなきゃだめなんだと言いました。パパが行ってしまったあと、ママと二人だけで残されました。ママは泣いて友だちや親戚に電話をかけ、すぐにみんなが来てくれました（スローボ、ドード、ケーカ、ママの弟のブラーツォ、それにメリツァおばちゃん。あんまりいっぱい来たのでおぼえきれなかった）。みんなママとわたしをなぐさめ、力になろうと来てくれたのです。ケーカはわたしがマルティナとマテアといっしょに寝られるように、わたしを家に連れていってくれました。朝

起きると、ケーカはなにも心配することはない、パパは二日すればもどってくるから、と言いました。

いまわたしは家にいます。メリツアおばちゃんがいっしょです。本当になにも心配することはないみたい。パパはあさつてには家に帰るでしょう。ああ、よかった！

一九九一年十月二十二日 火曜日

心配ごとはすべて解決しました。パパはきのう、ちやうど自分の誕生日にもどってきました。あしたはまた出かけます。これからずっとこんなふうにならぬように二日ごとに出かけて、毎回十時間ずつ任務につくそうです。わたしたちもこれに慣れなきやね。そう長くはつづかないと思うけど。

でも、これがどういうことなのかわたしにはよくわかりません。モンテネグロの予備兵がヘルツェゴビナに侵入してきただけ。でもなぜ？ なんのために？ たぶん政治的な理由だろうけど、わたしには政治はわかりません。スロヴェニアとクロアチアのつぎは、ボスニア・ヘルツェゴビナに戦いの風が吹いてくるのでしょうか？ まさか、そんなことはありえない。

一九九一年十月二十三日 水曜日

ドウブロヴニクでは本格的な戦闘せんとうが行なわれていて、町はひどい爆撃ばくげきを受けています。

人びとはシェルターにかくれ、水も電気もなくして電話も通じません。テレビにおそろしい映像が映しだされて、ママとパパは心配しています。あんな美しい町が破壊はかいされてしまうなんて、そんなことあるかしら？ ママとパパはあの町が大好きです。二人はあの町の司祭館でペンをとって、生涯しょうがいをとにもするという誓いちかにサインしたんですもの。あそこは世界じゅうでいちばん美しい町なのだから、破壊されてはならない、とママは言っています。

スルジャン（パパとママのいちばん仲のいい友だちで、家族をサラエボに残してドウブロヴニクで働いている）とその両親のことをみんな心配しています。町がこんなことになって、あの人たちどうしているでしょう？ 生きているのかしら？ 無線で連絡れんらくをとろうとしているのですが、通じません。スルジャンの奥さんのボキツァは死ぬほど心配しています。情報じょうほうを得るためにあらゆることをやっていますが、どれもうまくいきません。ドウブロヴニクは、ほかの世界からきりはなされてしまっています。

一九九一年十月三十日 水曜日

きょうピアノの先生からうれしい知らせがありました。今度市民コンサートがあつて、わたしはそこでひくことになったんですって！ 練習しなきゃ。カバレフスキーの、スロバキアの歌の六つの変奏曲をひきます。どの変奏曲も短いけれどむずかしいの。でも、とにかく精いっぱいやるつもりです。

学校のほうはとくに変わったことはありません。もうすぐ中間テストなので、みんないい点をとろうとがんばっています。日がどんどん短くなって、寒くなってきました。ということは、もうすぐ雪が降ること。ばんざーい！ ヤホリナ、スキー、一人乗りや二人乗りのそり、スキーリフト……待ちきれない！ ちょっと気が早いけど、もうスキー場のシーズン通しチケットを買ってあります。

一九九一年十一月五日 火曜日

合唱の練習から帰ってきたところです。声がかれちゃった。きょう先生が言ってたけど、もうすぐ演奏会をするんですって。わたしの生活にも「公式行事」が多くなりました！

「ナブッコ」と「アヴェ・マリア」「ベンバサへ行ったとき」「神を讃^{たた}えて」、それに「喜びの歌」を歌います。どれもすばらしい曲です。

一九九一年十一月八日 金曜日

いま、荷造りの最中です。バックパックにあなたを入れようとしているところよ、日記帳さん。週末をマルティナとマテア（M & M）のところで過ごすの。いいでしょう！ ママが行くことを許してくれたの。バックパックには教科書、パジャマ、歯ブラシが入っています。で、あなたを入れたら出発です。じゃあね!!

一九九一年十一月十日 日曜日

いま、午後四時半。M & Mの家から帰ったところです。すごく楽しかった。テニスをしたりテレビを見たり……外に出て散歩したり遊んだりしました。日記帳さん、あなたを持ってっただけで結局にも書かなかった。わたしのことおこつてないわよね？

宿題が終わったので、これからおふろに入って、テレビを見て寝ます。いつもの週末みたいにね。ああ、楽しかった！